

近江の水をめぐる 4

石川
亮

Name :

ISHIKAWA Ryo

Title :

The Water of Omi : Part Four

Summary :

I began making artworks using water I collected from springs throughout Shiga Prefecture in 2010. This marked the start of what has become my ongoing investigation of the background and roots of the various springs of Shiga Prefecture, most of which have names that can be traced back to traditional stories, area names, and the like. The focus of my current research is on the life that sprang up around water sources and the cultures to which the water gave rise.

近江（滋賀県）の地の水探求は自己の造形表現から始まった。二〇一七年の現在も様々なテーマでフィールドワークを行う際、必ず湧水の発見はあると言って良いだろう。探究を始めた当初は事前に書籍やガイドブックなどで調べることやインターネットで紹介される情報を元に湧水ポイントを目指して探し出すことが主であった。現地へ訪れると地域の方々との出会いがあり、急遽聞き取り調査からの新たな湧水発見に至ることもしばしばあった。昨今は他の目的で調査やフィールドワークをしていると、何となく湧水（水源）と巡り合えそうな空気を掴むことができるようになってきている。人々の暮らしや営みが活気づく場所には必ず綺麗で豊富な水を蓄える場がある。つまりそれは逆で水が豊富であるから人々が集い、営みが始まりやがて文化をつくり出していくのだと漸く気付いた。現在、私が把握している湧水ポイントは一二〇カ所をすでに超えており更に増え続け留まるとは到底思えない。琵琶湖を基点に淀川水系の最上流先端部である近江の水源は分水嶺から直接的に恵を受けていることから今後も無数に現れることは間違いない。次回の全体水（近江の水源）作品発表がいつになるかは未定だがその時に改めて整理されることと予想している。

石川 亮

一、面白い水、難しい水(おもしろいみず、むずかしいみず)――

面白い水、難しい水というタイトルをつけてしまった。これまで思いのままに、共通するテーマを見つけ出し、三、四カ所の水場を紹介してきた。思い起こせば美術家である私が初めて自分に近いエリアの考え方でタイトルを決めたのではないかと考える。さて、何が面白いのか、難しいのか、現代美術作品を目前にした時に、一番最初に作品がどうなのかを判断する分かれ道と言って良いだろう。その後の評論や感想は論者のこれまでの知識や経験等から、或は技術力の評価やその作品の強度をサポートしていくようなことであろう。些か乱暴な冒頭文であるが、これまで私が出会った中で印象に残っている面白い、難しいを湧水の現場に当てはめてみていきたい。

小碓の泉(おうすのいずみ) 米原市間田(はざまだ)

国道365号を南東方向へ姉川を左手に見ながら少し進むと野一色東という交差点がある。県道19号が東西に40号が南北に交わっており、この辺における私の水汲み研究の基点になっている。小田(やないだ)、間田(はざまだ)、春照(すいじょう/古くは水上)という地名が連なっており、伊吹山麓であることから湧水の宝庫といつて過言ではない。北国脇往還の宿駅のあったところである。その交差点を真東に19号線を少し進むと左手に小さな看板を見付けた。側溝を跨ぐように観光ガイドを



伊吹山麓の稜線が見える。小碓の泉



湧水口から水を汲む筆者。小碓の泉



道端の表札。小碓の泉



湧水口へ向かう途中の綺麗な水草。小碓の泉

唐突に知らせる看板がある。手描きで地元の人が描いたかのような案内をよむと、「小碓の泉は日本武尊にゆかりのある居醒の水の一つで七つの丘に囲まれた間田は古代から式内岡神社、日御子古墳、番匠岡古墳等がありこの低地の東方（約四百米）に清水の湧き出るところが古代遺跡の小碓の泉です。」と記されていた。住宅がちょうど途切れた場所で林に導くような景色であることから入口だとわかった。案内にあったように東へ、勢いよく流れる小川に沿って上流を目指し歩くと段々足元が悪くなってくる。少し不安になりながらも辺りを見渡すと緑に覆われながらも空が見え、とても清々しい。通常なら案内に従って少し歩くと水源が見つかるのだが小川はまだまだ続く。私が訪れた季節は冬の終わり雪解けの頃であったか、小川の水とそこに浮かぶ水草がとても美しかったと記憶している。気付くと農地に迷い込んだような感じである。恐る恐る進むと丘陵地との境目に行き着いた。丘の上を見上げると伊吹山の稜線がくっきり見える。境目を目指してできるだけ近づいた。既にトレッキングシューズには水がかなり染込んでいる。ようやく地表の裂け目を見付け水面がもやもやしているのを確認する事ができた。水面を下流の方へと見渡していくと高さが変わるところで溢れんばかりの水がジャバジャバ音を立てていることから相当の水が湧き出ていることがわかった。辺りに湧水を示す案内はなく半信半疑だ。しばらくその場に立ちすくんでいると入口の案内表示のことを思い出した。「下界との境界はあそこだった

のだ」と…。湧水を探し出す仕事をはじめて間もない頃だったので、今でも深く印象に残っている。命の水を見つけ出すのに言語は必要ないのだと、観光案内から導かれて野生の世界へ入り込み、動物が水にありつくかのごとく、原始脳に直接ひびいてくる感覚はこのことであろうかと、感動というものとも違う何か不可思議な記憶である。二度目に訪れたときは梅雨明けの頃で野草が背丈程まで生い茂り水源に到達することができなかった。

広野の湧水（ひろののゆうすい）高島市地小原・雲洞谷辺

再び辿り着く自信の無い場所である。二〇一二年六月、高島市朽木周辺の国道と県道沿いの湧水を求めて野放図に車を走らせていた時に出会った水場だ。国道367号線を北上して山神橋に差し掛かったところに三叉路が現れる。橋を渡らず安曇川の支流の方へ進むと再び三叉路が現れる。次も同じく支流の方へ県道23号をしばらく進むと三たび三叉路にでる。くつきの森の看板を横目に朽木能家方向を直進すると県道783号になる。何回か蛇行を繰り返しながら少しずつ登り坂を上がると、地小原の集落を過ぎたところで対向二車線の道が狭まり一車線になる。不安も期待も増し、谷沿い左右に川を眺めながら車を進めると山の斜面側に小さな木製の表札が現れる。側道の山側に車を寄せて、表札に近づくと崖からパイプが突き出ており、そこから勢いよく水が出ている。初夏の暑い日だったので一先ず顔



道端にある広野の湧水



広野の湧水で水を汲む筆者



広野の湧水

を洗ったのを記憶している。パイプの周りは苔むしており、周囲はシダ植物等が生えている。普通は鬱蒼としそうな感じだが、こまめに誰かが草抜きをされているのであろう。パイプの上には広野の湧水と書かれていた。この「湧水」は「涌水」である。少し左に目を向けるとホタルの生息地と書かれホタルのイラストが描かれた黄色い八角形の看板が目に入った。道路標識という黄と黒の危険を表すタイプだ。実はこっちの標識が先に目に入って次に木製の表札と水場に気付くのである。道沿いに突如として現れるホタルの生息地ならぬ水場である。

(もしかすると、もうちょっと行ったら、雲洞谷地区、洞照寺を越えた辺りの南東方向の斜面だったかもしれない。その先にとっても不思議な雰囲気山の山神社があるがそこまで間にあする事は確かなのだが、んー難しい。)

久太郎山の湧き水(くたろうやまのわきみず?)

七右柴門田の名水(しちえもんたのめいすい?) 高島市今津町
椋川

二つの名称を持つ水である。久太郎山の湧水と七右柴門田の名水と案内板に記載されている。正直言って正しい読み方がわからないのである。そして何故二つの人名を冠したのであろうか、おそらく久太郎さんの山、或いは七右柴門さんの田に係る湧水なのであろう。二〇一〇年の二月と二〇一二年の六月の二回現地を訪れたのだが、どちらも現地の人と会うことがで

きず、所以を尋ねることができなかった。その場所は高島市朽木から国道367号線を北上、檜峠を越えて今津町へ、途中谷へ下りる手前に西方向へ曲がる道がある。道路表示に従い椋川方面へ、しばらく走り左側へ大きくカーブをきりながら安曇川の支流を上流の方へ登っていく。道幅も狭くなり辺りはかなり物寂しくなってきた。少しひらけて何軒かの集落が見えると右側に近江の国を象徴するような洪い雰囲気を感じ出す神社が現れた。椋川の中心地に当たる場所なのだろうか、日当りがよく南側に田畑が広がり道沿いに小川が流れている。鳥居の扁額をみると日吉神社と記されていた。入ると真直ぐに伸びた杉が迎えてくれ奥の山裾に社がある。社の屋根の外側に柱が数本あることから冬期の大雪に耐える仕様になっていることがわかる。

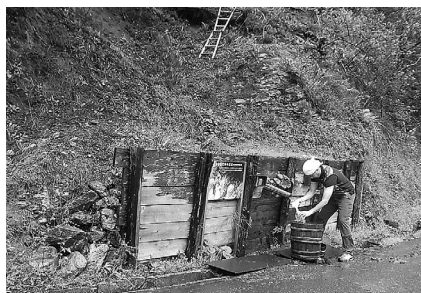
神社を出て更に上流へ数メートル歩くと何やら木桶が道に張り出しているのが見えた。近づくと山の斜面に対して板で土留めがなされており太めの竹筒が板から突き出ている。そこからジャバジャバと音を立てて水がその木桶に流れ込んでいた。

桶の箱にはコップが三つ程置いてあり、いつでも誰でも水が汲めるようになっていた。古い写真をデジタルプリントしたアルミ製の看板がついていた。読むと「七右衛門田の名水（久太郎山の湧き水）冬は暖かく夏は冷たい 岩の間から出ている湧き水 京都新聞県民版に紹介され多方面から人が訪れる。右下に平成二十一年吉日昭和十一年八月三日撮影 作者名」と記されていた。その写真は昭和初期と思われる風景に女性が取水口

に顔を向け水を飲んでいる。その前でおかつば頭の女の子がこちらを向いて笑っており、後方に母親と思われる女性が佇んでいる。これまで様々な表札を見たが現代の技術を用いながらも景観を犯さず、これに勝るしつかり作られた表札を見たことがない。神社と水場が近くにあり、日当りも良いことからこの辺の一等地であることは間違いない。おそらく村の人々が集う場所であったのであろう。誰かに会ってお話を聞いてみたかったが、とうとう会うことはなかった。

「面白い水、難しい水」は全くもって私の主観である。今回紹介した水において何か共通する点を感じ取っていただけであらうか？

わからないことが多くて考えれば考える程、謎が増えることは何においても面白い、難しいことである。近江にはまだまだ沢山このような水が存在すると想像する。その理由をじっくりと調査し、ゆっくり紐解いていくと暮らしか歴史の真実が見えてくるかもしれない。



久太郎山の湧き水を汲む筆者

二、始りの水、元の水(はじまりのみず、もとのみず) |

近江の湧き水を汲むそもそのきっかけとなった水を紹介したい。以前にも書いたが美術家である自身の作品「全体―水(近江の水源)」構想を始める前に近江において様々な水を集めるにあたってどのようなロジックで採取するのが良いのか考えていた。川の源流をたどり汲水する。或いは琵琶湖の水(全体の水)になる寸前の河口付近の水(〇〇川の水)を汲む。その他、地図状における経線緯線で囲まれたブロック内に存在する水を汲む。など水の集め方について、試行錯誤していた。いつもの様に自宅周辺の天津市仰木の里から仰木へと散歩をしていた時



道に突き出る久太郎山の湧き水



板でしっかり土留めをした水場。久太郎山の湧き水

のことである。豊かな棚田の田園風景を見ながら歩いていると、そもそもこの田畑を潤している水源は何処なのか気になってきた。地域の神社である小椋神社に辿り着き、調べていると奥宮の存在に気付いた。この奥宮は滝壺神社と呼ばれ名前の通り、水が湧き出し地域の方によって整備された小さな滝から常時水が流れ落ちていた。所以は後述するとして、「このような水を調べてみよう!」ということになった。家に戻り、名前の有する水が近江にはいくつあるのか、二〇一〇年の時点で書籍や観光ガイド、ネット情報だけで四〇カ所以上あることがわかり、真中に大湖を有することからまだまだあることは想像がついた。さらに近江は京都を上回る社寺仏閣を有する場所である。それだけ信仰が厚く神仏が習合する以前から地域信仰があったことも想像できる。社寺には必ず手水が存在し手を水で清めてから手を合わせ、祈るのである。生命体が生きていくうえで欠かすことのできない水、ここには日本人の自然観や宗教観の元となる感覚があるのではないか。

美術家である私が水を汲むことを表現にしようと考えた始りの水であり、元の水に迫っていききたい。

滝壺神社 祭神闇竈大神(たきつぼじんじゃさいじんくらおかみおおかみ)

湖西道路を北上、仰木雄琴の出口を下りて左折、県道315号を比叡山方面へ走ると右手に月読の棚田、その向うには琵琶

湖が広がっている。次に郵便局前の交差点を鋭角に左折するとそれが仰木集落の尾根を走るメインストリートになる。辻のバス停付近で少し右に折れると鳥居が見える。そこは里宮である小椋神社へと続く参道になっている。直に左に別れる道へ、上仰木を過ぎ、しばらく登り進むと元三大師道と記された石造道標が目に入る。左はその先、比叡山横川の元三大師堂へ続く道である。今回は右へ行く。この道は仰木峠を越えて京都大原へ続く道である。峠に立つ一本杉を目指し左手に小川を見ながら進むと棚田の風景から森林に変わるところに差し掛かる。そのちょうど境界に位置するのが小椋神社の旧社地、現在は奥宮、滝壺神社である。仰木の方で整備されたのであろうか「滝壺神社祭神闇竈大神」と記された石標が建ち裏に由緒書がされている。読むと

人皇第三十八代天智天皇が奈良から近江大津に御遷都乃砌（さい）山城から仰木峠を越えて近江に御入りになった際御伴をして来た丹生川上神社の宮人加太夫と言ふ人が清らかな水の滝を見て此乃佳き地に永住した其乃時川上神社の祭神闇竈大神乃分霊を御祀した乃が柳々小椋神社の始めである後今乃地に移し式内社小椋神社であり今尚仰木乃氏神として永久に尊崇せらる此乃所が仰木発祥乃地である

とある。その横の小さな滝壺へ水が流れ落ちていた。ふと見上げると奥まったところに石の鳥居と祠が見えた。扁額に



元三大師道の道標を右へ



闇竈大神参道の石標



滝壺神社の由緒書



仰木の田圃に水が張られる。(仰木祭)

は「闇竈大神」と記されている。闇（くら）は谷あいの意味。竈（淤加美神）は、古来より雨を司る龍神である。

実は住民が汲みに来る水は更に脇の山道を少し進んだ道沿いにある。斜面に筒が二本程差込んであり、いつも勢い良く水が出ている。京都と近江の往来が古くからある場所である森と里の境界にあり斜面がなだらかな場所であることから水場の条件を全て満たしているといえる。

毎年五月三日は小椋神社の祭礼、仰木祭の日である。あたりは雨乞いや祭の合図の太鼓が打ち鳴らされる。上仰木の瀧川幸作（たきがわこうさく）さんによると「太鼓の鳴りはリズムではない。あれは雨乞いの祈禱を言葉で表す代わりに音で示している。」と話された。

また、小椋神社の参道沿いに住む伊藤士良（いとうしろう）さんは代々向いに鎮座する山地神社のお世話をされてきた。その間を通る道と小椋神社参道の交差点には「闇竈大神参道」と記された石標が建っている。この道は先述した道に先で合流し奥宮への参道であると伊藤さんは話され、先代の伊藤家が建立されたことも付け加えられた。仰木に住まわれる方々のこの地に対する思いはある種の凄さを感じる。これが土地に対する畏敬の念なのかもしれない。

この祭礼が終わるといよいよ田植えが始まる。田圃に水が染み渡りカエルが鳴き出す風景はこの地が自然と共にくらしてきた豊かさの象徴に他ならない。仰木はこの水ともう一本



住民が汲みにくる湧水（祭神闇竈大神）



水が張られた仰木の棚田



祭神闇竈大神

違う谷筋からの水がくらしを支える水となっているようだ。
何を隠そうこれが湧水を探究する糸口となった始りの水である。

樹下の水（このものとみず） 日吉大社 樹下宮霊泉

「日吉大社にはもう一つ水が有る。」

東本宮の山手に位置する「亀井霊水」と山裾から流れる「大行事水」は以前とりあげた。もう一つとは東本宮の楼門から見て左手、牛尾山の麓に琵琶湖方向を向いて鎮座する樹下宮（じゅげぐう／このものとみず）の本殿の床下にある井戸のことである。本殿の裏側に回ると御神体が祀られている下は分厚い格子の扉がありしつかりと錠がされている。近づくと扉の向うは空洞になっており薄暗くて見えにくい。権宮司の井口健（いぐちたけし）氏にお願いして見せていただくことができた。以前から神仏習合の文化にふれるため、学生と比叡山回峰行の道を歩き、牛尾山を下りて一息ついた時に東本宮にて幾度とお話していた。次回は……と。

今回念願が叶い、本殿の中に入る許可をいただいた。いよいよ接近するとなると緊張が高まり、自然と何度も手を合わせた。御神体の直下は中空構造になっており外の光がかすかに入ってくる。土間の中心に直径六〇センチ程度であろうか穴が出現し円形に組まれた石積みが地中へ向って見えた。井口氏はそつと近くに燭台を置き、ろうそくに火を灯してくださった。すると

水面が揺れるのを確認することができた。耳を澄ますと微かに湧き出す水の音が聞こえた。美しいと感じた瞬間、即畏れ多い気持ちにせまってきた。何とも言いがたい感覚はこの先忘れられることはないであろう。

社務所へ戻る途中、欄宜の須原紀彦（すはらのりひこ）氏に出迎えていただいた。須原氏は日吉大社の歴史や様式など様々な研究をされており、神社のあるべき姿を持続するため自らナタやノコを持ち境内の整備をされている人である。（筆者には少なくともそのように見えている。）

そして今日掘んでいる様々な資料を見せただきながら樹下宮について色々お聞きすることができた。さて、この霊泉についてであるが正式な名称及び文書に伝わる由緒は現在のところ皆無だそうだった。ただ、これまでの研究においては神奈備山研究の景山春樹氏や元宮司の嵯峨井建氏が提唱する八王子山（牛尾山）の里宮とみて、霊泉が太古の祭祀場であった可能性をあげる考察は非常に興味深い。現在も樹下宮の霊泉、亀井や大行事水が湧出しているあたりの砂利を少し掘ると水が染出してくる。太古も豊かに水を湧出し、この周辺が生命の元であることを想像してしまうのは私だけであろうか。他にも樹下宮の持つ潜在能力は多々ある。樹下宮は神仏習合の時代、十禅師と呼ばれて多くの信仰を集め、本殿背後は禁足地であり玉垣で囲まれていた。十禅師馬場（参道）が東本宮の参道と並行して現存していること、上七社（西本宮、東本宮、宇佐宮、牛尾宮、白山

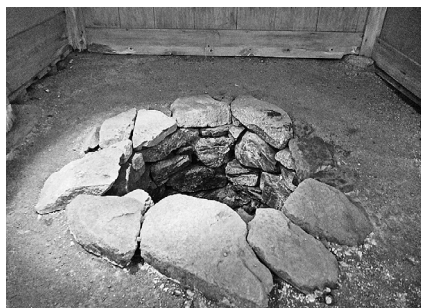
宮、樹下宮、三宮)の順列の六番目でありながらも山王祭での神輿に鳳輦(ほうれん)が掲げられること、宵宮場での神輿の位置も主神を思わせる場にあることなど樹下宮のもつ潜在能力を示す事柄が多い。その樹下宮の本殿直下に水が湧き、その水が境内を廻って坂本の町を流れる。その水路は山王祭における神輿のルートと一致している。井口、須原両氏はこれと断定することなく様々な考察や伝承をお話してくださった。

水の出自もしく、名称が伝わっていないのは他ならぬ水(霊泉)であるからであろう。私はあえて表題に「樹下の水(このものとみず)」と創作した。

近江の湧水探究は地元の仰木から始まった。ここで見るように地域の人々に崇められ、名称が存在する水に神仏の名を冠するものが多いことがわかる。探究をスタートさせた当初は「社寺仏閣に行けば何か手がかりが掴めるのでは」という予測から始まった。水道の蛇口をひねって水を使う我々には、何処に行けばきれいな飲める水にありつけるのか全く想像もつかない。逆に考えると水の湧き出る場所にこそ、自然に人々が集り、争いがおこらぬ様、崇め奉ったのではないだろうか。生命の源であり自然を崇拝する場となり、やがて畏敬の念を感じる場へと神格化して行ったのではなからうか。そのような場所に後々、社や寺が建立されたに違いない。今日の成熟



外から本殿下の中空を覗く



樹下宮霊泉



樹下宮の裏手より



東本宮参道の横に十禅師馬場がある

した現代社会において何時自分が精神に病を患うかわからない。効率化やロジックが先行する時代であるからこそ、我々には「ころの拠りどころ」が必要なのである。水は皆のものであり、誰のものでもないのだと。



水脈があるのか近くから水が湧き出ている



樹下宮本殿

三、文明の水、文脈の水(ぶんめいのみず、ぶんみゃくのみず)――

美術家である私がアーティストメントメント以外で文章表現することなど考えてもいなかった。そして元を返すと近江の湧水を探し出すことさえも想像していなかった。

美術家は自身で表現する「こと」を構想しテーマを決め、そこに材料や道具など必要なものを集めていく。ある程度の予想

のもと自身の作品の展開を想像するのであるが、「近江の水をめぐる」は、予想の範疇を遥かに超えたと考える。自身の創作や考えがいかに周辺との様々な関係で成り立っており、ものづくりが自身だけのものではないということに気付かされた。

二〇〇七年の春にスイス、ジュネーヴで「全体水(レマン湖+琵琶湖)」と題した作品を発表した。これは自然と人間の関係において文化的、歴史的背景の色濃い二つの湖水が溶け合い混ざる事で固有性が失われ、均質な水、科学的水(H₂O)となる。その状態を一部始終みせることで「全体水」と名付け作品化した。それはハイスピードでグローバル社会に突き進む中、固有性というものの在り方を問い直す意味がある。また水は地球上で生息する全てにとって無くてはならないものであり、誰のものでもないことを強く意識した作品である。

そして二〇一〇年の望遠展につづいて二〇一二年の自然学展覧会において近江の水源「全体水」を表現する事になる。ここで私は名前がついている近江の湧水を汲む構想をすることになる。結果として二〇一〇カ所以上の水源を近江(滋賀県)から探し出すことになった。

二〇一二年八月の自然学展覧会とは私が所属する成安造形大学と英国のロンドン大学ゴールドスミスカレッジとの共同研究事業であり、その一環として滋賀県立近代美術館で展覧会が企

画され、出版作家として参加することとなった。そこで問われたのは、「今日における西洋を中心とした近代以降の美学、芸術学では捉えきれないと考える未来社会に対する芸術表現は、どのような態度を取るべきか」副題に「来るべき美学のために」と題され人類学やエコロジー生態学など様々な分野を横断的に捉えていく思考とその表現を提案することとなった。日本人が何時の時代も自然と対峙しながらも折り合いをつけ持続してきた感覚や自然をくらしの中から排除できない感覚を提案することになったと考えている。

その後、中心メンバーの岡田修二氏（画家）とジョン・レバック・ドリバー氏（サウンドアーティスト）の誘いを受け、二〇一三年二月に自然学英国展への出展と展開することとなる。

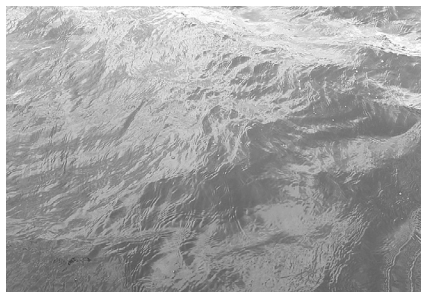
ここで私は「全体一水」構想の原点に立ち返るプランが脳裏を廻った。異なる二つの水、（琵琶湖の水とロンドンの水）を融合させることである。

英国ロンドンは産業革命を成功させ、近代文明の魁であることは言うまでもない。古代、エラトステネスが地球の大きさを求めることから始まったことに端を発し、地球という超自然物をグリッドで区切り、経線、緯線を設定し数値化した。そしてロンドンのグリニッジ子午線を基準とする経度表記が世界中で採用されている。これは今日に続くグローバルーションへと展開する原点と考えて良いだろう。そしてロンドン市外を貫き

北海へと注ぐテムズ河は世界経済や政略図を生み出してきたインフラの象徴と言って良いだろう。

私は迷うことなくグリニッジ天文台を背後にテムズ河と交差する場所を選んだ。「ここで水を汲もう！」雪まじりの小雨の中、どんよりとした川岸を歩き手持ちのスマートフォンが経度0を示す場所をさまよった。ちょうど0度を示す位置に小さな土手が顔を覗かせているのを発見した。そこで日本から持込んだ金製の柄杓を使用して汲水する。琵琶湖の透き通るような水とは相反して鼠色一色であった。乾燥しており既に摂氏0度を下回っていた筈だが、何故か寒さを感じなかった。それは私にとってはロンドンの中で最も立ちたい場所であり見たい光景にほかならなかったからである。

さて、琵琶湖は何処で水を汲むべきか。順番ではこちらの水を先に汲み、それを持ってロンドンに行ったのであるが、こちらも相当迷ったのを思い出す。本来的には琵琶湖そのものが湧水であるから湖底に潜るのが自然だ。しかし背後にうつる景色や琵琶湖の穏やかさが伝わらない。迷ったあげく私が暮らす湖西側でなるべく近い場所を選んだ。中でも琵琶湖大橋以北で比良山系の麓はあちらこちらで湧水が湧いていており、比較的綺麗な水が流れ込んでいる。そして我々の拠り所でもあり琵琶湖周辺で何処でも目にする事ができる神奈備山、三上山（近江富士）がはっきりと見える位置が望ましい。ズバリそのような



冬のテムズ河水面



琵琶湖の水を汲む



テムズ河の水を汲む

場所とは和邇川河口付近である。二月初旬の晴れた日、対岸とその向うまでクリアに見えた。湖水は細波（さざなみ）が立ち、湖底が透けるいつもの美しさの中、汲水した。



ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ



セントジェームス教会

自然学英国展はロンドン大学ゴールドスミスカレッジの施設内で行われた。ここでゴールドスミスカレッジとはどのような性格の美術大学か簡単に説明したい。国立であり欧州を中心に世界各国から学位を取得しに学生が集る。中でも作品を成立させる為のコンセプトやロジック、文化的背景、社会背景、作家個人としてアイデンティティが問われる。どちらかという一般的な難関なイメージで受け止められる大学と捉えている。一九九〇年代にはこの美術学校の卒業生を中心とする作家がFreeze（フリーズ／凍結、硬直？）と題した現代美術展を企画し世界中の美術関係者に衝撃（フリーズ）を与えた。当時私は彫刻を志す美大生でアカデミックな授業を受けながら世界

でおこるファインアート（現代美術）の動向を気にしていたのを覚えている。大学のキャンパスは煙突のあるロンドンらしい古い空き家になった家や教会を買取り、ジェントリフィケーションを起こしている。さらに超近代的なガラスを主とした新建築の校舎と複合させ、新旧ハイブリッドな空気を漂わせている。

展覧会はその区域内のセントジェームス教会を使用した。こは卒業制作展などが開催される場であり、学生が美術作家としてのビジネスをスタートさせる見本市会場のような性格をもつ場所らしい。私は学生の頃に夢見た場でアシスタントやキュ



ナショナルギャラリー



テートモダンよりセントポール寺院を望む。手前ミレニウムブリッジ

レーターに指示を送りながらの作品のセッティングを経験し、展覧会に漕ぎ着けた瞬間は感慨深いものがあつた。日本では考えられない私一人に与えられる空間や条件は今後の作家活動のキャリアになることは間違いない。岡田修二氏の琵琶湖の湖岸からモチーフを抜き出した絵画（グリザイユ技法／油彩古典技法）とジョン・レバック・ドリバー氏のサウンドアート（琵琶湖とロンドンの音を扱う作品）と私の「全体水（テムズ河・琵琶湖）」が教会内に展示され自然学英国展は成立した。それは前述した通り二つの水の水がプレートの上におかれ、ゆっくり溶け、混ざり合い何処の水でもない全体の水になる。



全体水（テムズ河・琵琶湖）



水辺（油彩画・岡田修二氏作）の作品前でジョンドレックドリヴァー氏の音作品に合わせて舞踏するダンサー

後日、ナショナルギャラリーやテートモダンを訪れた。前者

はロンドンの中心と言つて良いトラファルガー広場前、チャリングクロスにある。周囲にはビッグベン、ウエストミンスター教会がある。主として十三世紀から十九世紀までの宗教画から近代絵画をコレクションする美術館である。大英博物館もしかり、ヨーロッパ或いは世界の文化、科学、歴史変遷を、一手に引き受け編集する。「人間がつくりあげる世界の近代文化の中心ここに有り―」みたいな勢いを感じた。一方、後者のテートモダンとは第二次大戦後の英国復興を支えて来た発電所跡をリノベーションした建築で、様々な現代の表現に対応できる美術館である。ここからの光景はテムズ河をミレニアムブリッジで渡し、対岸のセントポール大聖堂に通じている。これだけの世界の近現代文脈を一手に引き受け編集しながらも人間の拠り所としてきた寺院や教会（宗教）とセットになっている。その条件は決まつて水辺であることは言うまでもない。

テートモダン最上階のカフェからセントポール大聖堂を望みながらふと想像してみた。琵琶湖を眼下に比叡山を望む我々の文化芸術の殿堂を…。

今日、我々が生かされ、脈々と受継がれる文化は先人が残してきた膨大な量の文脈の一端を引き継いでいることにほかならない。

近代文明が起つて間もなく、その文脈主義は近年、より強さを増し現実とは甚だ乖離したところで、その猛威を振るつてい

るように思う。そのリアルさが伴わない文脈はあげくの果てに「想定外の…」という始末だ。我々日本人は幾度となく自然の猛威にさらされ、或いは恩恵にあずかり共生してきた。自然と対峙してきた我々の自然観に想定内とか想定外という感覚は存在し得ないと私は考える。文明の利器に頼つてきた我々の豊かさとは何なのか、今こそ「豊かさ」を改める時期にきている。「手探り・身の丈」の感覚を超越した誰かの責任に任せるような時代、社会の終焉が迫っているのではなからうか。

追記

二〇一二年十二月より二〇一六年九月まで滋賀県文化振興事業団が発行する「湖国と文化」に「近江の水をめぐる」と題して近江の湧水を写真と文で紹介する機会をあたえられた。本編十五回と番外編一回の計十六回の連載の機会をいただいた。十四回から十五回の二回分と番外編一回のオリジナル文章を可能な限り残し、近江学研究紀要として再編集した。紀要の冒頭は二〇一七年一月現在における私自身の現況報告から始め、次に美術家目線でこれまでに見た湧水の中から特筆すべき視点として「面白い水、難しい水」、連載最終回とあつて、湧水に焦点をあてる始まりとなつた地元の水と我々の依り代、元となる水として「始りの水、元の水」と題して焦点をあてた。番外編では美術作家の活動記録、自然学ロンドン展における自身の作

品の在り方やその意味と作品に込める思いを「文明の水、文脈の水」として発表した。

冒頭にも記したが近江における水研究は自己の造形表現から出発した。「近江の水をめぐる。」は近江学研究所の研究紀要として四回にわたって記す機会をいただいた。水源を辿ることは水脈を辿ることであり、それは今日まで受継がれ続く近江の暮らし、生業、そのものを辿ることであると考える。そこで育まれ産み出された知恵、工夫、感覚が近江の感性そのもののようと思う。美術家であり造形表現を志す私にとってこの感性をしっかりと掴んで行きたいと考えている。世界都市「京都」の隣に位置し、様々な物資や情報の流通を直視し、今日を意識しながらも近江の足元の暮らしを保持してきた。絶えず次の社会の在り方をイメージしながら冷静に判断する感覚、感性は私の造形表現の探究に帰ってくる。水脈を追い続け水源を探すことを今後も持続したい。

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第6号

発行日 平成29年3月24日

発 行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 西久松吉雄

編 集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2016

ISSN 2186-6937